

サーンバ伝説の和訳 (2)

— 『サーンバ・プラーナ』 第 24 章および第 26 章 —

永井 悠斗

本稿は、サンスクリット語で書かれた宗教文献『サーンバ・プラーナ (Sāmba-Purāṇa : 以下 SP)』において語られるサーンバ伝説の和訳である。

なお、訳出範囲はサーンバ伝説の後半部にあたる、第 24 章 (SP 24, 1-38) および第 26 章 (SP 26, 1-53) とする。

伝説の前半部にあたる、第 3 章 (SP 3, 1-56) および第 6 章 (SP 6, 1-12; 23) や、サーンバ伝説全体の解説は、前稿 (永井 2020) を参照されたい。

1. テキストおよび和訳

凡例

- ・テキストは Stietencron (1966) 所収のテキストを底本とし、これに加えて Srivastava (2013) も参照した。そして、両者が異なる読みを採用している場合は、訳者の判断で適切と思われた読みを本文中に記し、もう一方のテキストにおける読みは註で示すよう努めた。また、和訳にあたっては、上掲の Stietencron (1966) 所収のドイツ語訳および Srivastava (2013) 所収の英語訳を適宜参照した。
- ・各詩節の区切りを示す二重ダングの使用と詩節の番号付けに関して、Stietencron (1966) と Srivastava (2013) には違いがあり、また、その両方に詩節の数に関して不備や混乱が見られる¹。そこで、便宜上の理由から、本稿の詩節番号は、参照した二つのテキ

¹ Stietencron は、詩節の番号付けに際して、自身が参照した SP の写本や印刷版の詩節番号には数字の脱落あるいは重複といった誤りが数多く見られること、そしてその修正が極めて困難であることを理由に、自身のテキストにもそれらの誤りを引き継ぐ一方、誤りと判断される詩節番号はイタリック体で表記するという方法を採用している。

本稿の訳出範囲から例を挙げれば、「SP 24, 7; 9」という表記は、彼が参照した SP の版が詩節の番号付けに関して、7 から 9 へと数字の 8 をスキップしていることを意味する。また「SP 26, 38; 38」あるいは「SP 26, 46; 46」といった表記は、彼が参照した版の詩節番号において、数字の 38 が重複していることを意味する。

このため、Stietencron のテキストにおいて SP 24 の詩節番号は「39」で終わるが、実際の総詩節数は 38 となる。また、SP 26 は詩節番号が「51」となるが、総詩節数は 53 となる。

一方、Srivastava は各詩節の区切りについては概ね Stietencron のテキストに則りつつも、その詩節の番号付けは、機械的に数えていく方法を採用。このため、Srivastava のテキストは、Stietencron のものと異なり、各章の最後の詩節番号と実際の詩節の総数は基本的に一致する。

このため、便宜上の理由から本稿の詩節番号は Stietencron ではなく Srivastava のテキストに従った。ただし、後者に誤りが疑われる、以下の二箇所に関しては前者に従って、テキストを訂正した。

ストを折衷した数え方となっている（違いの理由と詳細については注1を参照）。以下に、各テキストの詩節番号の対応関係を示す。

	本稿	Srivastava (2013)	Stietencron (1966)
SP 24	1-7	1-7	1-7
	8-24	8-24	9-25
	25	omitted	26
	26-38	25-37	27-39
SP 26	1-38	1-38	1-38
	39-47	39-47	38-46
	48-53	48-52	46-51

・訳文中の [] 内は訳者による補いの部分、() 内は直前の語の言い換えである。

・訳文や註において用いた略号は以下の通り。

MBh *Mahābhārata*

MDh *Mānava-Dharmaśāstra*

SP *Sāmba-Purāṇa*

Srivastava Srivastava, V. C., ed. and trans. 2013. *Sāmba-Purāṇa: An Exhaustive Introduction, Sanskrit Text, English Translation, Notes & Index of Verses*. Delhi: Parimal Publications.

Stietencron Stietencron, von Heinrich. 1966. *Indische Sonnenpriester: Sāmba und die Śākadvīpīya-Brāhmaṇa: Eine textkritische und religionsgeschichtliche Studie zum indischen Sonnenkult*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

テキストおよび和訳

SP 24, 1-38

vasiṣṭha uvāca

evam sūryasya mähātmyam varṇitaṃ harṣavardhanam |

pṛītvam āptavān eva tataḥ saṃśrūtya nāradāt || 1 ||

vinayād upasaṃgamyā devasya puratas tadā |

第一に、Srivastava のテキストでは、Stietencron のテキストにおける SP 24, 26（本稿での SP 24, 25）が脱落している（ただし、訳文にはテキストに存在しないこの詩節の内容が反映されている）。

当該詩節は cd 句を欠いているが、Stietencron はこれを一行半句から成る一詩節として扱っている。本稿もこれに従い、当該詩節を Stietencron から補った上で、独立した詩節番号を与えた。このため本稿と Srivastava のテキストの詩節番号は、SP 24, 24 以降で異なるものになっている。

第二に、SP 26 の最後の一行半句に関して、Stietencron がこれを cd 句を欠いた、独立した一詩節（SP 26, 51）とするのに対し、Srivastava は、これを前の詩節の ef 句とし、合わせて三行連句とする。

この最後の一行半句の取り扱いに関して、本稿は Stietencron に従い、独立した詩節番号を与えたため、本稿における SP 26 の総詩節数は、Srivastava のテキストより一つ多くなっている。

nīpatya dīmayā vācā sām̐baḥ pītarāṃ abravīt || 2 ||

ヴァスィシュタ仙は言った²。

このようにして描写された、幸福を増大させる、太陽神（スーリヤ）の偉大さ（マーハートミヤ）をナーラダ仙から聞き、まさに歓喜したサーンバは、それから神（クリシュナ）の現前へ、礼儀正しく近づいて跪くと、悲しげな言葉で父に対して語った。

sām̐ba uvāca

kaśmalenābhībhūto 'smi malenāṅgāvasevinā |

vaidyair nauśadhibhir vāpi na śāntir vidyate mama || 3 ||

vanaṃ yāsyāmi govinda anujñāṃ dātum arhasi |

śīvena pundarīkākṣa dhyāya mām̐³ puruṣottama || 4 ||

サーンバは言った。

「私は、四肢に宿る不浄な汚れによって苛まれております。[医術に] 熟達した者たちによっても、あるいは諸々の薬草によってであっても、私には[この苦しみを] 治癒する術がありません。ゴーヴィンダ（クリシュナ）よ！ 私は森へ行こうと思います。[私が森へ行くことを] どうかご承諾下さいませ。[私が] 幸運であるよう祈ってください。蓮の目を持つお方、最良なるお方よ！」

anujñātaḥ sa kṛṣṇena sindhor uttarakūlataḥ |

gatvā⁴ saṃtārayāmāsa candrabhāgāṃ mahānadīm || 5 ||

tato mitravanaṃ gatvā tīrthaṃ trailokyaviśrutam |

upavāsakṛśaḥ sām̐baḥ śuśko dhamānisam̐tataḥ || 6 ||

ārādhnanārthaṃ⁵ sūryasya guhyaṃ stotram idaṃ jagau |

caturbhiḥ sammitaṃ vedaiḥ purāṇāśrayabr̥mhitam⁶ || 7 ||

[そうして] クリシュナの承諾を得た彼は、インダス河の北岸から、大河チャンドラバガーに行くとき、これを横断した。それから、三界において名高い聖地ミトラヴァナ⁷へ行くと、断食によって痩せ細り、干乾び、血管の見えるほど衰弱したサーンバは、太陽神（スーリヤ）への礼拝のため、四つのヴェーダ聖典にも匹敵し、諸プラーナ文献に依拠することにより増大された、次のような秘密の賛歌を朗唱した。

² サーンバ伝説の前半部（SP3 および SP6）では、サーンバが、ナーラダ仙に不遜な態度をとったがために、彼の企みにより父クリシュナから呪いをかけられることになった次第が語られる。また、SP7 以降では、ナーラダ仙によってサーンバに、太陽神やその眷属に関する種々の神話・物語が語られ、その偉大さが説かれる。これに続く、サーンバ伝説の後半部（SP24 および SP26）では、そうしたナーラダ仙の言葉を聞いたサーンバが、自身にかけられた呪いからの解放を求めて、太陽神に帰依したあらし、そして太陽神の慈悲により呪いから解放されたサーンバが、太陽神のための寺院を建設した次第が語られる。

³ Srivastava : dhyāyasva

⁴ Srivastava : jñātvā

⁵ Srivastava : ārādhnanārthe

⁶ Srivastava : purāṇāśrayabr̥mhitam

⁷ Skt. mitravana : しばしば、今日のパキスタン、パンジャーブ州のムルターン市周辺に比定される。後出のように、このミトラヴァナにサーンバの太陽寺院は建設され、マガたちが連れて来られたという。

yad etan maṇḍalaṃ śuklaṃ divyaṃ hy ajaram avyayam |
yuktaṃ manojavair aśvair haritair brahmavādibhiḥ || 8 ||
ādir eṣa hi bhūtānām āditya iti saṃjñitaḥ |
trailokyacakṣur eṣo 'tra paramātmā prajāpatiḥ || 9 ||

「清浄にして神聖であり、不老不滅であり、聖典を語る⁸ [七つの韻律に等しい七頭の] 意の如く素早き黄褐色の馬たちに繋がれたこの円輪は、諸存在の「アーディ (始原)」であるから「アーディティヤ (太陽)」と呼ばれる。ここにおいて、この [円輪] は、三界における眼であり、最高我 (パラマートマン) であり、造物主 (プラジャーパティ) である」

ya eṣa maṇḍale hy asmin puruṣo dīpyate mahān |
eṣa viṣṇur acintyātmā brahmā caiṣa pitāmahaḥ⁹ || 10 ||
rudro mahendro varuṇa ākāśaḥ pṛthivī jalam |
vāyuh śāśāṅkaḥ parjanya dhanādhyakṣo vibhāvasuḥ¹⁰ || 11 ||

「この円輪において偉大なプルシャとして燦然たるこのお方は、思惟を超えたアートマンであるヴィシュヌ神であり、父祖たるブラフマー神でもあり、ルドラ神 (シヴァ神) であり、偉大なインドラ神であり、ヴァルナ神であり、虚空 (アーカーシャ) であり、大地であり、水であり、風であり、月であり、雨雲 (パルジャニヤ) であり、宝物を監督するクベーラ神であり、火神 (ヴィバーヴァス) である」

ya eṣa maṇḍale hy asminn agnivarcaḥ prakāśate |
sahasraśmir eṣo 'tra dvādaśātmā divākaraḥ || 12 ||

「この円輪において火の光明として光輝くこのお方は、ここにおいて、千の光線を持つ者、十二の姿を持つ者、昼を生み出す者である¹¹」

ya eṣa maṇḍale hy asmin puruṣo dīpyate mahān |
eṣa sāksān mahādevo vṛttakumbhanibhaḥ¹² śubhaḥ || 13 ||
kālo hy eṣa mahāyogī saṃhārotpattilakṣaṇaḥ |

「この円輪において偉大なプルシャとして燦然たるこのお方は、あたかも目に見える偉大な神 (マハーデーヴァ) であり、円い水瓶にも似ており¹³、美しい。このお方は、カ

⁸ Skt. brahmavādin : 馬たちが brahmavādin 「聖典について語る」と形容されているのは、これらの太陽神の戦車を牽く七頭の馬たちと、ヴェーダで用いられている主要な七つの韻律 (Gāyatī, Bṛhātī, Uṣṇih, Jayatī, Triṣṭubh, Anuṣṭubh, Pañkti) の同一視に基づく。

⁹ Srivastava : caiva prajāpatiḥ

¹⁰ Srivastava : dhanādhyakṣas tathaiva ca

¹¹ 「千の光線を持つ (Skt. sahasraśmi)」、「十二の姿を持つ (Skt. dvādaśātman)」、「昼を生み出す (Skt. divākara)」は、いずれも太陽の異名である。

¹² Srivastava : vṛttaṃ kumbhanibhaḥ

¹³ Skt. vṛttakumbhanibha : この語が修飾しているのは、mahādeva ではなく、直接的には maṇḍala (日輪としての太陽) であると思われる。『リンガ・プラーナ』I, 61, 6 には、SP と同様に、vṛttakumbhanibha と śubha という二語を、太陽と月の円盤 (maṇḍala) に対する修飾語として用いている例が見出される。

ーラ (時間/黒き者) であり、偉大なヨーガ行者 (マハーヨーギン) であり、破壊と再生を特徴とする者である¹⁴⁾

ya eṣa maṇḍale hy asmiṃs tejohiḥ pūrayan mahīm || 14 ||

bhramate hy avyavacchinno dhātaiṣo 'mṛtalakṣaṇaḥ |

nātaḥ parataro devas tejasā vidyate kvacit || 15 ||

「この円輪において、大地を諸々の輝きで満たしつつ、中断されることなく巡行することのお方は、創造主であり、不死を特徴とする。それ故、輝きの点で [太陽神より] 優れる神は全く存在しないのである」

puṣṇāti sarvabhūtāni hy eṣa eva svadhāmṛtaiḥ¹⁵⁾ |

antasthān¹⁶⁾ mleccchajātīyāṃs tiryagyonigatān api || 16 ||

「他ならぬこのお方が、あらゆる諸存在を、辺境に住む、蛮族 (ムレーチャ) の生まれの者や動物の胎より生れ出た者たちであれ、祖霊への供物 (スヴァダー) や神々の飲料 (アマリタ) によって、育むのである」

kāruṇyāt sarvabhūtāni pāsi deva vibhāvaso |

āpatsu ca vimokṣārthaṃ tvaṃ bhaktān abhiraḥṣase || 17 ||

śvitrakuṣṭhyandhabadhirān¹⁷⁾ khañjān paṅgūñ jaḍāṃs tathā |

prapannavatsalo deva nīrujaḥ¹⁸⁾ kuruṣe narān || 18 ||

dadrugaṇḍanimagnāṃs¹⁹⁾ ca nirvaṇān²⁰⁾ puruṣāṃs tathā

pratyakṣadarśi tvaṃ deva samuddharasi līlayā || 19 ||

「太陽神 (ヴィバーヴァス) よ！ 貴方は慈悲心の故に、あらゆる諸存在を保護する。そして、諸々の不幸に際しては、救いを求めて [貴方に] 帰依する者たちを庇護する。神よ！ [救いを求めて] 平伏す者たちに慈愛深き貴方は、白癩患者や盲人や聾人たち、跛行となったり、手足が不自由になったり、動けなくなってしまった人々の苦痛をなくさせ、そして、皮膚病や腫瘍に覆われた人々の傷をなくす。神よ！ [万事を] 自らの眼で見通す貴方は [人々を] いとも容易く救い出す」

kā me śaktiḥ stavaṃ²¹⁾ stotum ārto 'haṃ rogaṇīḍitaḥ |

stūyase tvaṃ sadā deva brahmaviṣṇuśivādibhiḥ || 20 ||

sūryācandramasor divye maṇḍale bhāsvare khage | jalatejomaye śukle vṛttakumbhanibhe śubhe || (『リング・プラーナ』 I, 61, 6)

¹⁴⁾ 「カーラ (『時間/黒き者』)」、「偉大なるヨーガ行者」はいずれもシヴァ神の異名。さらに、よく知られるように、シヴァ神は破壊とそれに続く再生を司る神である。

¹⁵⁾ Stietencron: sudhāmṛtaiḥ

¹⁶⁾ Srivastava : antastho

¹⁷⁾ Srivastava : citrakuṣṭhāndhabadhirān

¹⁸⁾ Srivastava : nīrujaḥ

¹⁹⁾ Srivastava : dadrugaṇḍanimagnāṃs

²⁰⁾ Stietencron : nirvaṇān

²¹⁾ Srivastava : śaktis tava

mahendrasiddhagandharvair apsarobhiḥ saguhyakaiḥ |
stutibhiḥ kiṃ pavitrair vā tava deva samīritaiḥ || 21 ||

「どうして賛歌を朗唱することが私にできようか。私は病いに苛まれ、苦しめられております。神よ！ 貴方は常に、ブラフマー神、ヴィシュヌ神、シヴァ神らを始めとする [神々] によって、そして偉大なインドラ神や聖者 (シッダ) たちやガンダルヴァたち、アプサラスたちや、グヒヤカたち²²によって称えられております。[そのような] 貴方にとって、発せられた諸々の賛歌や浄めの聖句が、一体何になるというのか」

yasya te rgyajuḥsāmnām tritayaṃ maṇḍale sthitam |
dhyāninām tvaṃ²³ paraṃ dhyānaṃ mokṣadvāraṃ ca mokṣiṇām || 22 ||

「神よ！ 貴方の円輪には「リグ・ヴェーダ」「ヤジュル・ヴェーダ」「サーマ・ヴェーダ」の三つが存在しており、そのような貴方は、瞑想する者たちにとっては最高の瞑想対象であり、解脱に努める者たちにとっては解脱への門である」

anantatejasākṣobhyo²⁴ hy acintyāvyaktaniṣkalah²⁵ |
yad apy apāhṛtaṃ kiṃcit stotre `smiñ jagataḥ pate || 23 ||
ārtiṃ bhaktiṃ²⁶ ca vijñāya tat sarvaṃ kṣantum arhasi |

「[貴方は] 尽きぬ輝きを伴う不動者であり、思惟を超えた未顕現にして分割されぬ者である。世界の主よ！ たとえもしこの賛歌の中に、失われてしまった [詩句が] 何かあったとしても、[私の] 病いと信愛 (バクティ) をお認めになって、どうか全てご寛恕ください」

tam uvāca tataḥ²⁷ prītaḥ sūryo jāmbavatīsutam || 24 ||
prīto `smi tapasā vatsa varam brūhi yad icchasi || 25 ||

すると、喜んだ太陽神 (スーリヤ) は、そのジャンバヴァティーの息子 (サーンバ) に言った。「愛しき子よ！ [お前の] 苦行で、私は喜ばしい気持ちである。お前が望んでいる願いを述べなさい」

sāmba uvāca

yadi prasanno bhagavān eṣa eva varo mama |
bhaktir bhavatu me nityaṃ tvayi deve²⁸ sanātane || 26 ||

サーンバは言った。

「もし貴方様にご満足になられたのであれば、私の願いはこれに他なりません。永遠な

²² シッダ、ガンダルヴァ、アプサラスそしてグヒヤカはいずれも天界に住むとされる半神的種族。また、グヒヤカはクベーラ神の眷属ヤクシャと同一視される。

²³ Srivastava : tu

²⁴ Srivastava : anantaṃ tejasām tejo

²⁵ Srivastava : acintyāvyaktanirmalam

²⁶ Srivastava : ārtabhaktiṃ

²⁷ Srivastava : naraḥ

²⁸ Stietencron: deva

る神である貴方に対する私の信愛が絶えることはありませんように！」

sūrya uvāca

bhūyas tuṣṭo 'smi bhadram te varam varaya suvrata |
sa dvitīyaṃ varam vavre taṃ devaṃ varadaṃ śubham || 27 ||
malaṃ śarīrastham idaṃ tvatprasādāt praṇaśyatu |

太陽神（スーリヤ）は言った。

「私はより一層満足した。汝に栄えあれ。[次の] 願いを望みなさい、誓戒を良く守る者よ！」

[そこで] 彼（サーンバ）は、願いを叶える清らかなるその神に、二番目の望みを求めた。「身体に存在するこの不浄を、貴方の恩情の故に、消し去ってくださいますように！」

tathāstv ity uktamātro 'sau bhāskareṇa mahātmanā || 28 ||

tan mumoca malaṃ sāmbo dehāt tvacam ivoragaḥ |
tato labdhavaraḥ²⁹ sāmbo rūpavāṃś cābhavat punaḥ || 29 ||

偉大なる魂の太陽神（バースカラ）が、ただ「そのようになれ」とだけ言うと、かのサーンバは、あたかも蛇が身体から皮膚を脱ぐようにして、その不浄を脱ぎ捨てた。そうして、願いの叶ったサーンバは再び美しい姿となった。

sūrya uvāca

bhūyaś ca śṛṇu me sāmbo tuṣṭo 'haṃ yad bravīmi te |
adyaprabhṛti tvannāmnā mama sthānāni suvrata || 30 ||
kṣitau ye sthāpayiṣyanti teṣāṃ lokaḥ sanātanaḥ || 31 ||
sthāpayasva ca mām asmimś candrabhāgātate śubhe |
tava nāmnā ca sāmbedam puraṃ khyātiṃ gamiṣyati³⁰ || 32 ||
kīrtis tavākṣayā loke yāvad bhūmir bhaviṣyati |
bhūyaś ca te pradāsyāmi pratyahaṃ svapnadarśanam || 33 ||

太陽神（スーリヤ）は言った。

「サーンバよ！ 重ねて私から聞きなさい、満足したこの私がお前に述べることを。誓戒を良く守る者よ！ この日より、お前の名前によって、私の座所をこの地上に建立せんとする者たちには、永遠の世界がある。そして、お前はこのチャンドラバーガー河の美しき岸辺に私を置き定めよ。サーンバよ！ そして、この都はお前の名前によって名高いものとなるであろう。お前の名声は、大地の限りまで、世間において不朽のものとなるであろう。さらに、私は毎日お前に[太陽神である私を] 夢において幻視する力を与えよう」

evaṃ dattvā varam tasmai vṛṣṇiṣimhāya bhāskaraḥ |
pratyakṣadarśanam dattvā tatraivāntaradhīyata || 34 ||

²⁹ Srivastava : labdhavārah

³⁰ Srivastava : tvat sanāma idaṃ cāpi puraṃ sāmbo bhaviṣyati

このようにして太陽神（バースカラ）は願いを叶え、ヴリシュニ族の獅子たる彼（サーンバ）に〔神を〕己の眼で見る力を与えると、その場で姿を消した。

ya idaṃ paṭhate³¹ stotraṃ trikālaṃ bhaktimān naraḥ |
nārī vā duḥkhaśokārtā mucyate śokasāgarāt || 35 ||
caḥṣuḥpīḍā³² manaḥpīḍā grahaḥpīḍā³³ eva ca |
bandhanair nigaḍair ghoraiḥ kāragāragrheṣu³⁴ yā || 36 ||

この賛歌を日に三度朗唱する、信愛を抱く男は、あるいは不幸や悲痛に苛まれている女は、悲痛の海から救い出される。他ならぬこの者に、眼の痛み、精神の痛み、諸惑星〔のはたらき〕によって生じる痛みや、牢獄において〔その人を〕束縛する恐ろしい足枷によって〔生じる痛み〕が〔あったとしても〕。

adhastād antarikṣe vā kṣamate³⁵ bhaktavatsalaḥ³⁶ |
trisaptaśatam āvartya homaṃ vā saptarātrikam³⁷ || 37 ||
rājyakāmo labhed rājyaṃ dhanakāmo labhed dhanam |
rogārto mucyate rogād yathā sāmbas tathaiva saḥ || 38 ||

崇拜者たちに慈悲深き〔太陽神〕は、下方であるいは中空において赦し給う。二千百回あるいは七日七夜の間、ホーマ献供を繰り返した後、王権を欲する者は王権を手に入れ、財産を欲する者は財産を手に入れるであろう。病いによって苦しめられた者は、サーンバがまさにそうであったのと同様に、病いから救い出される。（第24章結）

SP 26, 1-53

vasiṣṭha uvāca

atha labdhavaraḥ sāmhaḥ prāpya³⁸ rūpaṃ purātanam |
manyamānas tadāścaryaṃ prahr̥ṣṭenāntarātmanā || 1 ||
pūrvābhyāsenā tenaiva sārddham anyais tapasvibhiḥ |
snānārthaṃ nātidūrasthāṃ candrabhāgāṃ nadīm yayau || 2 ||

ヴァスィシュタ仙は言った。

さて、願いの叶ったサーンバは、かつての美しい姿を取り戻すと、喜悅の心とともに、それを奇跡と考えて、また再び他の苦行者たちを連れて、沐浴のために、程遠くない位置にあるチャンドラバーガー河へ向かった。

³¹ Srivastava : paṭhed dvija idaṃ

³² Stietencron : caḥṣupīḍā

³³ Srivastava : grahaḥpīḍābhyā

³⁴ Srivastava : kāṣṭhāgāragrheṣu

³⁵ Stietencron: takṣate

³⁶ Stietencron: bhaktivatsalaḥ

³⁷ Srivastava: trisaptaśatam āvartahomas tv āsaptarātrikam

³⁸ Srivastava : prāptaṃ

sa snātaḥ sahasaivātha paśyati sma prabhāvafīm |
 uhyamānām jalaughena pratimām³⁹ unmukhīm raveḥ || 3 ||
 sa tām uttīrya salilād ānīya ca⁴⁰ svam āśramam |
 tasmin mitravanoddeśe sthāpayitvā vidhānataḥ⁴¹ || 4 ||
 tatas tām eva papraccha praṇamya pratimām raveḥ |
 keneyaṃ nirmitā nātha bhavato hy ākṛtiḥ śubhā || 5 ||

彼が沐浴すると、そこで全く思いがけず、水の流れによって運ばれて来た、顔側を上に向けた太陽神の光り輝く像を見つけた。彼は、それを流れから拾い上げて、そして自身の隠棲所へ持って行き、ミトラヴァナのその場所に儀軌に則った仕方で安置すると、それから、他ならぬその太陽神の像に拝礼してから尋ねた。「主よ！ 誰によって、この美しき貴方様の像は作成されたのでしょうか？」

pratimā tam uvācātha śṛṇu sām̐ba yatas tv iyam |
 nirmitā yena cāpy eṣā puruṣeṇa madākṛtiḥ⁴² || 6 ||
 mamāтитеjasāviṣṭam rūpam āsīt purātanam |
 asahyaṃ sarvabhūtānām tato 'ham prārthitaḥ suraiḥ || 7 ||
 sahyaṃ bhavatu te rūpaṃ sarvapṛāṇabhṛtām iti⁴³ |
 tato mayā samādiṣṭo viśvakarmā mahātapāḥ || 8 ||
 tejasaḥ śātanam⁴⁴ kurvan rūpaṃ nirvartayasva me |

すると、神像は彼に言った⁴⁵。「サーンバよ！ この私の神像が何故、そしてまた何者によって作成されたのかを聞きなさい。私のかつての姿は、甚だしい輝きで満ちており、あらゆる諸存在にとって耐え難いものであった。それ故、神々は私に『貴方の姿が、あらゆる生物たちにとって耐え得るものになるように』と懇願したのであった。そこで、私は偉大なる苦行者であるヴィシュヴァカルマン神に、『輝きを削ぎ落とし、私の像を作り出せ』と命じた」

tatas tu matsamādeśāt tenaiva nipuṇam tadā || 9 ||
 śākadvīpe bhramiṃ kṛtvā rūpaṃ nirvartitaṃ mama |
 pṛītyā te sām̐prataṃ caiva sa mayā kāritaḥ⁴⁶ punaḥ || 10 ||
 teneyaṃ kalpavṛkṣāt tu nirmitā pratimā mama |
 kṛtvā himavataḥ pṛṣṭhe puṇyasiddhaniṣevite || 11 ||
 tvadarthaṃ candrabhāgāyāṃ tatas tenāvatāritā |

³⁹ Srivastava : pratimām

⁴⁰ Srivastava : ānayitvā

⁴¹ Stietencron: sthāpayāmāsa tām tadā

⁴² Stietencron: madīyā puruṣākṛtiḥ

⁴³ Srivastava : iha

⁴⁴ Srivastava : śātanam

⁴⁵ ヒンドゥー教において、神の像というものが、ある神の単なる似像ではなく、その神本人の現れと理解されることに基づき、以下では「(太陽神の) 像が言った」等、神像 (Skt. pratimā/ākṛti) を主語とする表現が散見される。

⁴⁶ Srivastava : kāritaṃ

bhavatas tārāṇārthaṃ hi jātaṃ sthānam idaṃ mama || 12 ||

ruciṃ sarvadā cātra sām̐nidhyaṃ me bhaviṣyati || 13 ||

sām̐nidhyaṃ mama pūrvāhne udite drakṣyate⁴⁷ janāḥ |

kālātyaye ca madhyāhne sāvāhne⁴⁸ cātra nityaśaḥ || 14 ||

「それから、私の命令の故に、他ならぬ彼は、巧みにシャーカ大陸で轆轤を回して、私の像を作り出した。そしてまさに今、お前に対する好意の故に、私は彼に再び[私の像を]作らせたのである。彼によってカルパ樹から作成されたこの私の像は、有徳の聖者(シッダ)たちが住まうヒマラヤ山脈の後背地で作られた後、お前のために、そこからチャンドラバーガー河へ流されたのである。というのも、私のこの座所は、お前の救いのために作り出されたのであるから。また、ここにはいつでも私の光り輝く顕現が起こるのであろう。人々は、私の顕現を、朝[太陽が]昇る時に、そして時間が経過した昼にも夕にも、ここで常に目にするだろう」

vasiṣṭha uvāca

śrutvā devasya tad vākyaṃ dṛṣṭvā pratyakṣadarśinam |

kṛtvā devagr̥haṃ sām̐bas tataḥ provāca nāradaṃ || 15 ||

ヴァスィシュタ仙は言った。

サーンバは、その神の話を聞き、神を己の眼で目の当たりにして、神のための寺院を建てると、それからナーラダ仙に尋ねた。

sām̐ba uvāca

tvatprasādān mayā prāptaṃ rūpaṃ etat purātanam⁴⁹ |

pratyakṣadarśanaṃ cāpi bhāskarasya mahātmanaḥ || 16 ||

sarvam etac ca sam̐prāpya punaś cintākulaṃ manaḥ |

devasya paricaryāyāḥ pālanaṃ kaḥ kariṣyati || 17 ||

guṇayuktaṃ dvijaṃ kiṃcit⁵⁰ samarthaṃ paripālāne⁵¹ |

mamaivānugrahād brahman vicintyākhyātum arhasi || 18 ||

サーンバは言った。

「貴方(ナーラダ仙)の慈悲深さの故に、このかつての美しい姿を私は取り戻し、さらにまた、偉大なる魂の太陽神(バースカラ)を己の眼で目の当たりにすることも出来ました。しかし、こうした全てを得ても再び[私の]心は思い乱れております。神への奉仕を遵守するような者は、どのような者なのでしょう？ 遵守をする能力のある有徳のバラモンを数名、私への好意の故に、よく考えてから挙げてください、バラモンよ！」

evam uktas tu sām̐bena nāradaḥ pratyuvāca tam || 19 ||

⁴⁷ Srivastava : rajyate

⁴⁸ Srivastava : om.

⁴⁹ Srivastava : sanātanam

⁵⁰ Srivastava : guṇayukto dvijo yo hi

⁵¹ samarthaṃ paripālāne] em.; Stietencron : samarthaparipālāne; Srivastava : samarthaḥ paripālāne

サーンバにこのように言われたナーラダ仙は、彼に答えて言った。

nārada uvāca

na dvijāḥ pariḡṛhṇanti devasyātmikṛtaṃ dhanam |
vidyate ca⁵² dhanam hy atra guruś cāyaṃ pratigrahaḥ || 20 ||
devacaryāgatair dravyaiḥ kriyā brāhmī na vidyate |
avajñāyā⁵³ ca kurvanti ye kriyāṃ lobhamohitāḥ⁵⁴ || 21 ||
apāṅkteyā bhavanīha te vai devalakā dvijāḥ |
avijñānavidhānā⁵⁵ ye brāhmaṇā lobhamohitāḥ || 22 ||
devasvam upayokṣyanti patitās te bhavanti hi |
garhitaṃ mānavam śāstraṃ na praśaṃsanti te dvijāḥ || 23 ||

ナーラダ仙は言った。

「バラモンたちは、神が己の所有物とされた財産を所有しない。なぜなら、財産はこの方に属するのであり、そしてこの尊敬されるべき [神] が、[そうした施物の] 受け取り手なのであるから。神々 [の像] への奉仕⁵⁶によってもたらされる財貨によってなされるバラモンの行為というものは存在しない。そして、軽蔑でもって行為するような、貪欲さによって惑乱させられた [バラモン] たちはこの世において、共食することを許されざる⁵⁷デーヴァラカ⁵⁸というバラモンである。学識もなく儀軌も知らず、貪欲さによって惑乱させられて、神々の財産を使い尽くしてしまうようなバラモンたちは、墮落した者たちである。そのようなバラモンたちは、非難すべきことに、『マヌ法典 (マーナヴァ・[ダルマ] シャーストラ)』を尊重しないのである」

devasvam brāhmaṇasvam ca yo lobhād upajīvati |
sa pāpātmā pare loka ḡṛhrocchiṣṭena jīvati⁵⁹ || 24 ||

『神々の財産あるいはバラモンの財産を、貪欲さから利用して生きる罪深い者は、あの世で秃鷹の食い残しで生きる』 (MDh 11. 26)

⁵² Stietencron : hi

⁵³ Srivastava : avijñāya

⁵⁴ Srivastava : kriyālobhamohitāḥ

⁵⁵ Srivastava : avijñānavidhānaṃ

⁵⁶ 原語 Skt. devacaryā : 特に寺院における神像への奉仕あるいは神像を世話する行為を指すと考えられる。SP 26. 25 では、バラモンはこれを行わないとされる。

⁵⁷ 原語 Skt. apāṅkteya : 「共に食事をするのが許されない」の意で、この語は MDh 3.167 にも見え、学識のあるバラモンはこうした共食を許されない最低のブラーフマナを避けねばならないとされる。

⁵⁸ 原語 Skt. devalaka : 寺院付きの祭官で、神像への供物によって生計を立てる下級のバラモンとされる。MDh 3, 150-166 は、バラモンが共に食事をするのを許されない種々の職業者や種族が列挙される箇所であるが、その列挙された者たちの中にデーヴァラカの名前も見える。

⁵⁹ MDh 11. 26 からの引用。

Olivelle 2005 : devasvam brāhmaṇasvam ca lobhenopahinasti yah | sa pāpātmā pare loka ḡṛhrocchiṣṭena jīvati || 26 ||
渡瀬信之 2013 : 「神々の財産あるいはブラーフマナの財産を欲から侵害する罪深い者は、あの世で秃鷹の食い残しで生きる」

tato na⁶⁰ brāhmaṇaḥ kaścīd devacaryāṃ kariṣyati |
vidhijñāṃ jñānavantaṃ ca paricaryākṣamaṃ tathā |
samākhyāsyati te devas tasmāt taṃ śaraṇaṃ vraja || 25 ||

「それ故、いかなるバラモンも神々[の像]への奉仕をなそうとは決してしないだろう。儀軌を知り、学識を有し、[神々への]奉仕に相応しい者のことは、神(太陽神)がお前にお教えになるだろう。したがって、お前は彼に庇護を求めよ」

nāradenaivam uktas tu praṇamya śirasā ravim |
saṃśayaṃ paripapraccha kas te pūjāṃ kariṣyati || 26 ||

ナーラダ仙にこのように言われた彼は、そこで太陽神(ラヴィ)に頭を下げ、拝礼してから、件の疑念のことを尋ねた。「貴方への供養(プージャー)は誰がなすことになるのでしょうか？」

vijñāptā⁶¹ tv atha⁶² sām̐bena pratimā tam uvāca ha |
na yogyaḥ paricaryāyāṃ jambūdvīpe mamānagha || 27 ||

mama pūjākarān gatvā⁶³ śākadvipād ihānaya |
さて、サーンバに尋ねられた神像は、彼に言った。「罪なき者よ！私への奉仕に相応しい者は、ジャンブー大陸にはいない。お前は、私への供養をなす者たちのところへ行き、[その者たちを] シャーカ大陸からここへ連れて来なさい」

lavaṇodāt pare pare kṣīrodēna samāvṛtaḥ⁶⁴ || 28 ||
jambūdvīpāt paras⁶⁵ tasmāc chākadvīpa iti śrutaḥ |

「[その大陸は] 塩水の海の遥か向こうにあり、乳の海によって取り囲まれていて、このジャンブー大陸から離れており、シャーカ大陸という[名前で]知られる」

tatra puṇyā janapadās cātvarṇyasamāśritāḥ || 29 ||
magās ca māmagās⁶⁶ caiva mānasā mandagās tathā |
magā brāhmaṇabhūyiṣṭā māmagāḥ⁶⁷ kṣatriyāḥ smṛtāḥ⁶⁸ || 30 ||
vaiśyās tu mānasā jñeyāḥ sūdrās teṣāṃ tu mandagāḥ |
na teṣāṃ saṃkaraḥ kaścīd varṇāśramakṛtaḥ kvacit⁶⁹ || 31 ||

⁶⁰ Srivastava : 'nyo

⁶¹ Srivastava : vijñāpte

⁶² Srivastava : acha

⁶³ Srivastava : pūjāparān kṛtvā

⁶⁴ Srivastava : samāvṛtaṃ

⁶⁵ Srivastava : paraṃ

⁶⁶ Stietencron : maśakās

⁶⁷ Stietencron : maśakāḥ

⁶⁸ Srivastava : kṣatriyās tathā

⁶⁹ SP 26, 29cd-31 は、MBh に並行箇所が存在する。その他、『ヴィシュヌ・プラーナ』などの他の複数のプラーナ文献にも並行詩節が見られる。

MBh VI, 12, 33-35 (Sukthankar and Belvalkar 1947, 66f.) :

tatra puṇyā janapadās catvāro lokasaṃmatāḥ | magās ca maśakās caiva mānasā mandagās tathā || 33 ||

dharmasyāvvyabhicāritvād ekāntasukhitāḥ⁷⁰ prajāḥ |
tejasā ca madīyasya⁷¹ nirmītā vai purā mayā || 32 ||

「そこには、四つの種姓（ヴァルナ）に属する有徳の人々がいる。[その四つは] マガたち⁷²とマーマガたち、そしてマーナサたち、それからマンダガたちで、マガたちは大部分がバラモンであり、マーマガたちはクシャトリアであると知られている。一方、彼らにとってのヴァイシャがマーナサたちであり、他方、シュードラはマンダガたちであると知られるべきである。彼らには、四種姓（ヴァルナ）と四住期（アーシュラマ）の身分秩序の交雑はどのようなものであれ全く存在しない。法（ダルマ）からの逸脱が無い故に、その人々はひたすら幸福である。そして、彼らはかつて私の輝きから、私によって作り出された」

tebhyo vedās ca catvāraḥ sarahasyā mayeritāḥ⁷³ |
vedoktair vividhaiḥ stotraih parair guhyair mayā kṛtaiḥ || 33 ||
mām eva te ca dhyāyanti mām yajante⁷⁴ ca nityāśaḥ |
madbhāvanā madyajanā⁷⁵ madbhaktā matparāyaṇāḥ⁷⁶ || 34 ||
mama śusrūṣakās caiva mamaiva vratacāriṇaḥ |

「彼らには、秘密の教えを伴う四つのヴェーダ聖典が、私によって告げられた。彼らは、ヴェーダ聖典によって述べられ、私によって作られた様々な最高の秘密の賛歌でもって、他ならぬ私だけを観想し、そしてまた常に私に対して祭式を行っている。[彼らに] 私を想念し、私への祭式をなし、私を信愛し、私に帰依する者たちであり、私の信奉者たちでもあり、そして他ならぬ私への誓戒を遵守する者たちである」

avyaṅgadhāriṇaḥ sarve vidhidṛṣṭena karmaṇā || 35 ||
kurvanti te sadā tatra mama pūjāṃ manonugām |
tatra devāḥ sagandharvāḥ siddhās ca saha cāraṇaiḥ || 36 ||
viharante ramante ca dṛśyamānās ca taiḥ saha |

magā brāhmaṇabhūyiṣṭhāḥ svakarmaniratā nrpa | maśakeṣu tu rājanyā dhārmikāḥ sarvakāmadāḥ || 34 ||
mānaseṣu mahārāja vaiśyāḥ karmopajivinaḥ | sarvakāmasamāyuktāḥ sūrā dharmārthaniscitāḥ | sūdrās tu mandage
nityaṃ puruṣā dharmāśilinaḥ || 35 ||

上村 2002, 53f. :

「そこには、世人に尊敬される四つの清浄な国土がある。すなわち、マガ、マシヤカ、マーナサ、マンダガである。王よ、マガには主として自己の仕事に専念するバラモンたちがいる。またマシヤカには、すべての願望をかなえる徳高い王族たちがいる。大王よ、マーナサには、それぞれの仕事で生活する実業者（ヴァイシャ）たちがいる。彼らは一切の願望を満たされ、勇猛で、法（ダルマ）と実利（アルタ）に専念している。マンダガには、常に法を守るシュードラの人々がいる。」

⁷⁰ Srivastava : ekānte sukhitāḥ

⁷¹ Srivastava : cāsmadīyasya

⁷² 先行研究はこのマガ（マガ・ブラーフマナ）について、古代イランの宗教者、いわゆるペルシアのマジとの関連性を指摘する。先行研究におけるマガのイラン起源に関する議論、およびマガの風習とイラン宗教の類似については、永井 2019, 39-45 を参照。

⁷³ Srivastava : mayoritāḥ

⁷⁴ Srivastava : japante

⁷⁵ Srivastava : mama parā

⁷⁶ Stietencron : matparāyaṇaḥ

śvetadvīpe⁷⁷ tv ahaṃ viṣṇuḥ kuśadvīpe maheśvaraḥ || 37 ||

puṣkare ca smṛto brahmā śākadvīpe ca bhāskaraḥ |

「彼らは皆、アヴィヤンガ⁷⁸を身に着けて、儀軌に則った儀礼行為でもって、そこ（シャーカ大陸）で私に対して常に、意に叶った供養を行っている。そこには、ガンダルヴァたちやチャーラナたち⁷⁹と共に、神々やシッダたちが、愉快に過ごしたり、楽しんだりして、彼らと一緒にいるのが見出される。シュヴェータ大陸ではヴィシュヌ神、クシヤ大陸ではシヴァ神（マヘーシュヴァラ）、プシュカラ大陸ではブラフマー神として知られる私は、シャーカ大陸では太陽神（バースカラ）として知られる」

tān⁸⁰ magān mama pūjārthaṃ śākadvīpād ihānaya || 38 ||

āruhya⁸¹ garuḍaṃ sām̐ba śīghraṃ gacchāvicārayan⁸² || 39 ||

「サーンバよ！ お前は、そのようなマガたちを、私への供養のためにシャーカ大陸からここへ連れて来なさい。ガルダ鳥に乗り、躊躇うことなく、速やかに行きなさい」

vasiṣṭha uvāca

tatheti pratigṛhyājñāṃ raver jāmbavatisutaḥ |

punar dvāravatīm gatvā kāntyāiva samāvṛtaḥ || 40 ||

ākhyātavān pituḥ sarvaṃ svakīyaṃ devadarśanam |

tasmāc ca garuḍaṃ labdhvā yayau sām̐bo 'dhiruhyā tam || 41 ||

ヴァスイシュタ仙は言った。

ジャーンバヴァティーの息子（サーンバ）は、「その通りに」と言って、太陽神（ラヴィ）の命令を受けると、再びドヴァーラヴァティーの都へ行き、この上ない美しさに包まれながら、自らが神とまみえた事をそっくり父（クリシュナ）に語ったのであった。そして、サーンバは、彼から神鳥ガルダを受け取ると、その上に乗り〔シャーカ大陸へ〕向かった。

śākadvīpam anuprāpya samprahṛṣṭatanūruhaḥ |

tatrāpaśyad yathoddiṣṭān sām̐bas tejasvino magān || 42 ||

vivasvantam pūjayato dhūpagandhādibhiḥ śubhaiḥ |

abhivādya tu tān sarvān kṛtvā caiva pradakṣiṇām || 43 ||

prṣṭvātho 'nāmayaṃ⁸³ teṣāṃ ślāghayāmāsa tāṃs tataḥ |

シャーカ大陸へ到着すると、歓喜で体毛が逆立ったサーンバは、そこで、述べられた通

⁷⁷ Srivastava : śvedvīpe

⁷⁸ マガたちが身に付けるとされる腰紐のことで、ゾロアスター教徒が身に付ける聖紐 (AV. aiṣīñhana) に比定される。この聖紐は今日のパールシーの間ではクスティエの名前で知られ、その着用はゾロアスター教徒の義務とされる。

⁷⁹ チャーラナは、ガンダルヴァらと同様、天界に住む種族の一つで、天界の楽士として知られる。

⁸⁰ Srivastava : tān

⁸¹ Srivastava : āruḍho

⁸² Srivastava : gaccha vicāraya

⁸³ Srivastava : prṣṭvo 'tho nāma yaṃ

りの輝かしいマガたちが、心地よい芳香（ドゥーバ）や香物（ガンダ）などで太陽神（ヴィヴァスヴァット）に対して供養を行っているのを目にした。そこで彼は、彼ら全員に恭しく挨拶し、右繞⁸⁴してから、彼らの息災を尋ねると、それから彼らを称えた。

yūyaṃ hi puṇyakarmāṇo draṣṭavyāś ca śubhārthibhiḥ || 44 ||
 ratā ye⁸⁵ 'rkasya pūjāyāṃ yeśāṃ⁸⁶ caiva varapradāḥ |
 tanayaṃ vitta⁸⁷ māṃ viṣṇoḥ sām̐baṃ nāmnā ca viśrutam⁸⁸ || 45 ||
 candrabhāgātate cāpi mayā sūryo niveśitaḥ |
 tenāhaṃ preṣitaś cātra uttiṣṭhadhvam̐ vrajāmahe || 46 ||

[サーンバは言った。]「太陽神（アルカ）への供養に耽っており、[太陽神によって] 望みが叶えられる貴方たちは、幸福を望む者たちによって、行い正しき方々であると考えられております。ヴィシュヌ神の息子で、サーンバという名前で知られるこの私のことを、お見知りおきください。そしてまた、この私によって、太陽神 [の像] がチャンドラーバーガー河の岸边に置き定められました。そして、彼（太陽神）が私をここに遣わしたのです。立ち上がってください。さあ、我々は行きましょう！」

te tam ūcus tataḥ sām̐bam evam etan na saṃśayaḥ |
 asmākam api devena vyākhyātaṃ pūrvam eva hi || 47 ||
 aṣṭādaśakulānīha magānāṃ vedavādinām |
 yāsyanti ye tvayā sār̐dham̐ yatra saṃnihito raviḥ || 48 ||

すると、彼らは彼（サーンバ）に言った。「疑いなく、それはその通りである。なぜなら、それは神によってかつて我々にも語られたことだから。ここに、ヴェーダ聖典に精通したマガの十八の氏族（クラ）がいます。彼らは貴方と一緒に、太陽神（ラヴィ）が御座すその場所に行くつもりです」

sa tu gr̐hya tatas tāni daśa cāṣṭau kulāni ca |
 āropya garuḍe sām̐bas tvaritaḥ punar abhyagāt || 49 ||
 sa putradārasaṃyukto pūjāyajñāya cāgataḥ |
 so 'lpenaiva tu kālena prāpto mitravanaṃ punaḥ || 50 ||
 kṛtvājñāṃ tām̐⁸⁹ raveḥ sām̐bo yat kṛtaṃ tan⁹⁰ nyavedayat |

そこで、サーンバはそれらの十八の氏族を連れて、ガルダ鳥に乗ると、再び速やかに [ジャンプー大陸へ] 向かって行った。そして、彼は [マガたちの] 子供や妻たちを連れて、供養と祭式のために [ジャンプー大陸に] 戻って来て、僅かな時間で再びミトラヴァーナへと到着した。

⁸⁴ Skt. pradakṣiṇā : 敬意の対象を中心に、その周囲を右回りするという表敬行為。

⁸⁵ Srivastava : yo rato

⁸⁶ Srivastava : tasya

⁸⁷ Srivastava : viddhi

⁸⁸ Srivastava : nāmnā sām̐ba itī śrutaḥ

⁸⁹ Srivastava : kṛtvā jñātām̐

⁹⁰ Srivastava : yan

raviḥ śobhanam ity uktvā prasannaḥ sām̐bham abravīt || 51 ||

mama pūjākārā hy ete prajānām śāntikārahāḥ |

mama pūjām vidhānoktām⁹¹ kariṣyanti manonugām || 52 ||

tatkr̥te na⁹² punaś cintā tava⁹³ kācid bhaviṣyati || 53 ||

[こうして] 太陽神 (ラヴィ) の命令を果たすと、サーンバは、それが果たされたことを [太陽神に] 報告した。喜んだ太陽神 (ラヴィ) は「素晴らしい」と言って、サーンバに語った。「私への供養をなし、人々に繁栄をもたらすこの者たちは、儀軌に則り、意に叶った仕方、私を供養するであろう。その者たちがなすことについて、いかなる思い悩みも二度とお前には生じないだろう」(第26章結)

【参考文献】

Olivelle, Patrick, ed. and trans. 2005. *Manu's Code of Law: A Critical Edition and Translation of the Mānava-Dharmaśāstra*. New York: Oxford University Press.

Srivastava, V. C., ed. and trans. 2013. *Sām̐ba-Purāṇa: An Exhaustive Introduction, Sanskrit Text, English Translation, Notes & Index of Verses*. Delhi: Parimal Publications.

Stietencron, von Heinrich. 1966. *Indische Sonnenpriester: Sām̐ba und die Śākadvīpīya-Brah̐mana: Eine textkritische und religionsgeschichtliche Studie zum indischen Sonnenkult*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Sukthakar, V. S. and Belvalkar, S. K., ed. 1947. *The Mahābhārata vol.7 Bhīṣmaparvan*, Poona: Bhandarkar Institute Press.

上村勝彦訳 2002 『原典訳 マハーバーラタ 6』ちくま学芸文庫, 筑摩書房.

永井悠斗 2019 「インド文献に現れる宗教者「マガ」—先行研究と関連文献の整理—」『宗教学・比較思想学論集』20: pp.39-58, 筑波大学宗教学・比較思想学研究会.

永井悠斗 2020 「サーンバ伝説の和訳および解説 (1) —『サーンバ・プラーナ』第3章および第6章—」『宗教学・比較思想学論集』21: pp.39-58, 筑波大学宗教学・比較思想学研究会.

渡瀬信之訳注 2013 『マヌ法典』東洋文庫, 平凡社.

(ながい・ゆうと 筑波大学人文社会科学研究所 哲学・思想専攻)

※本稿は、JSPS 科研費 20J10840 の助成を受けたものである。

⁹¹ Srivastava : pūjavīdhānoktām

⁹² Srivastava : tatkr̥te ca

⁹³ Srivastava : na te